

(別紙 2)

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 オレン エイタン

“Military Threat Perception in Postwar Japan: the Soviet Union, China and North Korea”と題される オレン エイタン氏執筆の本論文は、国際安全保障環境のなかにおける対外脅威認識について、適切な分析枠組みを形成するための理論的考察を行うとともに、その考察に基づいた分析枠組みを利用しつつ、ソ連、中国、北朝鮮に関していかなる脅威認識が戦後日本で形成されたのかを実証的に解明し重要な知見を数多く生み出した論文である。

本論文の優れた点は、第一に、これまで、ややもすれば漠然かつ概括的にとらえられてきた「脅威認識」という概念について、誰が持つ脅威認識であるかという分析単位の問題、さらには脅威認識を包み込む「安全保障に関する態度」など他の「間主観的」な関連概念との関係性、そしてこれらの諸概念に影響を与えうる脅威の空間分布と時間分布に関する 2 つの「解釈コード」の提示を行い、理論面での精緻化を行ったことである。単純化していえば、誰がいかなる時期に、誰からの脅威を最も強く認識するかは、それぞれのアクターの安全保障に関する態度に影響を受け、さらに脅威をもたらしうる言動の空間的な志向性や時間的な集中性によって影響をうけるとというのが本論文の理論的主張である。

本論文の優れた点の第二は、上述の分析枠組みにもとづき行ったソ連、中国、北朝鮮に関する日本の脅威認識について、実証的に重要な知見を生み出したことである。従来、冷戦期におけるソ連や中国に対して日本では脅威認識が欠如していたという概括的な観察が行われることが多かったのに対して、本論文は、防衛専門家、政治家、メディア、一般国民のそれぞれについて、体系的かつ、可能な場合は数量的な分析を行い、それぞれの経年変化を示すことに成功した。特に国会議事録を基礎データとした分析で、ソ連の脅威に関する認識の変化を表した部分は印象的である。また、1960年代の核実験後の中国についての脅威認識が、最高指導者周辺のみに限られ、社会全体としての脅威認識を高める言動が避けられたこと（明示的なセキュリティゼーションが行われなかったこと）

も重要な知見である。さらに、冷戦期のソ連や中国に対する脅威に対して、冷戦後の北朝鮮に対する脅威認識が、すべてのアクターを通して極めて強くなっていることを示したことは理論的にも興味深い知見である。軍事的にいつて現在の北朝鮮よりもはるかに強大な存在であった冷戦期のソ連や現在の中国に比べて、現在の北朝鮮に日本人の多くが強い脅威認識を持っていることが、さまざまなデータから示され、著者の安全保障に対する態度や解釈コードの適用のされ方から説明されている。

本論文の第三の優れた点は、現代日本研究とりわけ日本の安全保障研究への貢献であり、さらには世界的な安全保障研究への貢献である。現代日本の安全保障への態度とくに脅威認識については、国際政治学のさまざまな学派による異なる解釈が提示されてきているが、どれも必ずしも満足のいく解釈を提示できているわけではない。とくに国際政治学の主流ともいえる現実主義的解釈は、日本の脅威認識について極めて説得力の薄い説明しかなしえていない。これに対して、著者の分析は、より構築主義的な解釈に属するものであるが、従来の構築主義的解釈よりはるかにダイナミックに、そして異なるアクターを弁別した説明を生み出している。また、本論文の著者によるこのような日本の脅威認識の分析が指し示すことは、世界の安全保障研究の中でも有力なセキュリタイゼーション理論に対して修正を迫る可能性を指し示している。

このように本論文は、日本の脅威認識の分析を通して、理論的革新、実証的知見の提示、学界における従来学説への挑戦という 3 つの観点で、大きな学問的貢献を行った論文である。理論的考察を行っている部分の論述が、細部にわたり、あるいは重複がみられことによって難解になっていること、実証研究における重要な知見について、従来の見解との差を十分丁寧に指摘していないなど、なお論文としては改善しうる部分も存在しているが、これらの点は、本論文の学問的価値を大きく損ねるものではない。

よって本論文は博士 (学際情報学) の学位請求論文として合格と認められる。